

竹川病院 木下 崇美 (理学療法士)

功 績 五年前に入院していた患者の当時大学生の娘が父の闘病・入院生活を経験し、来年度より理学療法士として、今度は自分が感動を与える側となり竹川病院で働くことを希望します。当時、進路の悩みに親身に相談に乗り、入院中の患者と家族を支えた素晴らしい関わりが長い年月を経て実を結んだ功績。

推 薦 者 可児 利明

推 薦 理 由 セラピストを志した動機には、自身がスポーツで怪我をしたり、家族がリハビリを受けた経験をした者が多いです。志すきっかけとなることは多くても、その病院で働きたいとまで言ってもらえることは中々ないことだと思います。理学療法士として木下、およびチームの5年前の対応が素晴らしかったのだと推察し、一人ひとりの使命感が表れた例として理事長賞にふさわしい功績と考えます。

内 容

今から約5年前、患者は夕食中に椅子から突然崩れ落ち、緊急で腰の手術をすることとなりました。リハビリ目的で当院回復期病棟に転院し、崩れる膝に長下肢装具を装着しての立位練習からリハビリが始まりました。当時大学生であった娘は、突然、一家の大黒柱を襲った不幸に不安な日々を過ごしながらも、家族で懸命に父のリハビリを支えました。チームアプローチでの効果が少しずつ表れ、歩行再獲得のめどが立ったころ家族は笑顔を取り戻し、娘である彼女の心の中に変化が生まれ始めました。大学三年生であった彼女は就職活動を再開しましたが、自分の進路について悩み始めました。父のリハビリによる回復過程を経験し自分も理学療法士として働きたいと考えるようになったのです。理学療法士の道に進むためには、養成校に入り直し、金銭的にも負担をかける、そんな彼女の悩みや葛藤にも親身に相談にのり、木下自身の経験から夜間の養成課程があることを提案したり、大学は中退せず、きちんと卒業することをアドバイスしました。

父は退院時には自立歩行を獲得し、現在では社会復帰を果たしています。4年間夜間部の養成課程を終えた彼女は来春卒業し、理学療法士としての1歩を踏み出す予定です。先日の就職説明会に参加してくれた彼女の言葉が大変印象的でした。「あのころと変わらず患者さんだけでなく家族もしっかりと支えてくれた竹川病院で働きたいです。あのころと全く変わっていないリハビリ室の雰囲気大好きです。」病気や障害は対象者のみならず家族も不幸にしてしまいます。そんな大変な状況の中で、家族をしっかり支え、親身に寄り添う木下の関わりは社会復帰を果たす以上の価値を提供することができたのだと思います。